

I. Introduction

Seven Types of Ambiguity (1930) は言語的分析批評としてウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare) や形而上詩人達を多く取り上げ、詩の分析に終始徹底しているところに特徴がある。また、この著書はウィリアム・エンブソン (William Empson) のデビュー作であり、彼が24歳の時に出版されたものだが、80年近くの歳月が流れようとする今日でさえ比較的容易に入手できる、いわば、英文学研究の必読書のひとつと言えるだろう。とりわけ、ニュー・クリティシズムと称される文学批評家達に及ぼした影響は多大なものであったようだ。たとえば、矢本定幹は「1938年に刊行されたクリアンス・ブルックス (Cleanth Brooks) と R.P. ウォレン (Robert Penn Warren) の共著である『詩の理解』(*Understanding Poetry*) は全くエンブソンの *Seven Types of Ambiguity* のバリエーションといったものである」(矢本 266) と述べており、また、スタンレー・ハイマン (Stanley E. Hyman) によれば、「J.C. ランサム (John Crowe Ransom) は *Seven Types of Ambiguity* について未だかつてこれほど想像力に富んだ詩の読み方を説いた本はなく、エンブソンほど綿密にして豊かな資質を内に持った読者を詩がかつて公に所有したことはないと思う」と述べ、また「これほど鋭く、同時に忍耐強く終始一貫した書物は、I.A. リチャーズ (Ivor Armstrong Richards) とエンブソン以前にはイギリス批評に存在しなかったと思う」(岡本 60)¹ との賛辞をおくっている。このように *Seven Types of Ambiguity* は今や古典的著書としての地位を確立しているが、この著書の誕生の経緯は非常にドラマティックなものである。それを紹介するためにはエンブソンの学生時代に遡る必要がある。

エンブソンはウインチェスター・カレッジを経て、ケンブリッジ大学モードリン・カレッジへ進学することになるが、当初は数学を専攻していた。そ

の後、エンプソンは最終学年に英文学に転向し、I.A. リチャーズの指導の下、後の *Seven Types of Ambiguity* の中核となる論文を書き上げた。この論文こそ、彼の最初の産物であるといっても過言ではない。

岩崎宗治は *Seven Types of Ambiguity* の日本語訳『曖昧の七つの型』のはしがきで、「エンプソンは、実践批評の熱心な出席者ではなかったが、I.A. リチャーズの文学理念には共鳴していて、たまたまローラ・ライディング (Laura Riding) とロバート・グレイヴス (Robert Graves) の『モダニストの展望』 (*A Survey of Modernist Poetry*) を読んで、E.E. カミングス (E.E. Cummings) の句読点のない短詩とシェイクスピアのソネット 129 番を並べて分析した章に触発され、I.A. リチャーズの前でまるで手品師のようにソネットから元気のいいウサギをつぎつぎと取り出してみせたのである。I.A. リチャーズはエンプソンの才能に一驚し、分析を続けるよう励ました。2 週間たつとエンプソンは大部の原稿を抱えて I.A. リチャーズの前に現れたのである。」(岩崎① 11-12) と、若き日のエンプソンのエピソードを掲載している。このときタイプで打ち込んだ約 30,000 語の論文が *Seven Types of Ambiguity* の基になった。

この著書におけるエンプソンの ‘ambiguity’ とは、言葉自体に内在する要素ばかりではなく、作者および読者の心理状態も現れているとしている。したがって、その定義は複雑な要素から成り立っており、それが著書の豊かさを増大させていると考えられる。具体的には、エンプソンはフロイト心理学や文化人類学の影響を受けて、作者が意識していないものを読者が読み取ることも可能であると主張し、また、作者の側からみても作品は決して作者の制作意図にだけ係わるものではなく、さまざまな無意識の要素が入り込んでいるという指摘である。

本論文では、エンプソンの ‘ambiguity’ における定義、7 つに分類された ‘ambiguity’ そしてフロイト心理学を用いた第 7 の型に注目したい。

II. ‘ambiguity’ の定義

‘ambiguity’ は「曖昧」と訳され、印象的にはあまり良い意味では用いられ

ない単語のように思われる。エンプソンも著書の中で「通常の会話の中において、‘ambiguity’ は、はっきりした意味を持ち、機知に富んだ場合や人を惑わす場合に用いられる」(Empson 1) と述べている。では、そもそも、この‘ambiguity’ には本来どのような意味があるのか。語源を辿ると、‘ambiguity’ は ‘ambi’ と ‘guity’ に分けられ、これらの要素はラテン語に由来している。さらに ‘guity’ は ‘gu’ と ‘ity’ に分けられるので、この語は3つの要素から成立していることがわかる。‘ambi’ は ‘about’ や ‘around’ と同様に「周りを、周囲に」という意味があり、‘gu’ には ‘move’ 「動く」、‘ity’ には ‘state’ 「状態」という意味があるので、これらの意味を全て並べると「周りを」+「動く」+「状態」となり、さまよい動く印象を与える。そして、ここから派生した意味のいくつかが辞書に掲載されている。まず、*Oxford English Dictionary* では ‘ambiguity’ の定義を以下のように掲載している。

1, a. Objectively: Capability of being understood in two or more ways; double or dubious signification, ambiguousness.

b. *spec.* in *Literary Criticism*

1930 W. Empson *Seven Types of Ambiguity* i.

2, *concr.* A word or phrase susceptible of more than one meaning; an equivocal expression.

(OED)

OEDによると、この単語は大別して2つに区別されている。² さらに、*Webster (3rd ed.)* では、‘ambiguity’ について、より多くの定義を掲載している。

1, a (1): the condition of admitting of two or more meanings, of being understood in more than one way, or of referring to two or more things at the same time.

(2): looseness of signification or reference.

b (1): uncertainty of meaning or significance or of position in relation to

something or somebody else.

(2): mystery or mysteriousness arising esp. from a vague knowledge or understanding.

2: the intellectual or emotional interplay or tension resulting from the opposition or contraposing of apparently incompatible or contradictory elements or levels of meaning in a poem or other literary work; *esp.*: the opposition or contraposition of two or more meanings inherent in one word or symbol or in a consistent set of metaphoric or symbolic words.

3: the maintaining of two or more logically incompatible beliefs or attitudes at the same time or alternately: inconsistency resulting from vacillation between two opposing views.

4: an ambiguous word or expression 〈a poetical (ambiguity) depends on the reader's weighting the possible meanings according to their probability — William Empson〉

(Webster 3rd ed.)

Webster (3rd ed.)によれば大別して4つに区別されており、³とりわけ、最後の定義にエンプソンの‘ambiguity’が当てはまるとしている。詩の特質については、I.A. リチャーズも言っているように、詩の意味というよりも詩に使われている語句の意味は複雑で、意味が明瞭だと思われている 18、19 世紀の詩もよく吟味すれば、解釈や意味には曖昧なものや不明瞭なものが数多く見受けられる。詩は詩人の情緒的経験の表現であるため、詩に使われている言語は情緒的用法にしたがっている。つまり、メタファーによって表現しているので、詩の言語は辞書の意味を超えた情緒的意味を含んでおり、したがって、解釈が難解となるが、*Seven Types of Ambiguity*はこの点に着目して詩の言語を分析した。‘ambiguity’には、いくつかの意味が存在するが、エンプソンはその定義を著書の中で「どんなに僅かなニュアンスでも、それが同じひとつの表現に別の反応の余地を与えるならば、それは私のテーマに関係があると考えらるつもりである。」⁴ (Empson 1) と述べている。したがって、こ

の定義によれば、ある作品の文脈からひとつの語（または、ひとつの文法構造も含めて）、二重（または、それ以上の）の意味を内包する場合にエンプソンのいう‘ambiguity’に該当するものであると考えられる。

注意しておきたいことは、エンプソンの‘ambiguity’の定義は再版におけるものであり、初版の定義とは異なっている点である。初版では、小川和夫の訳によれば‘ambiguity’を「何かの言葉の続き具合の結果として、たとえば、ごく軽いものにしても散文の直載な叙述に何らかのニュアンスが加わる場合、これを‘ambiguity’と呼ぶことにしたい。」（小川 111-12）⁵と定義したのである。しかし、エンプソンは再版の注において「‘ambiguity’という語をあまり拡大解釈すると、ほとんどその意味が無くなってしまう」（Empson 1）という見解を述べ、また、ジェイムズ・スミス（James Smith）が‘ambiguity’における述語の用い方に異議を唱えたことからエンプソンは‘ambiguity’の定義を上記のように変更したと説明している。

以下では、エンプソン自身がスミスの反論を *Seven Types of Ambiguity* に対する代表的批判として取り上げているので、長い再版の序文にある議論の一部をここに紹介しておく。

エンプソン氏の本には多くの不適切な要素がある。それらは、‘ambiguity’の本質と範囲について氏が漠然としか考えていないところからいくらか派生しているが、おそらくはまた、それら不適切な要素によって氏の考えの茫漠さが助長されてもいる。こういう‘ambiguity’を、劇の中や、我々の社会経験および、心の組織等において、彼はあらゆるところに見出し、そこから偉大な詩のあらゆる部分には‘ambiguity’が発見できるに違いないと推論する。しかし、サッフォー（Sappho）、ダンテ（Dante）、ワーズワス（Wordsworth）の〈ルーシー詩篇〉を思い出すことのできる読者が、この議論を受け容れられるかどうか疑わしいと思う。仮に、受け容れられるようになるとしても、その前にエンプソン氏がその立場をより明確にすることが必要である。‘ambiguity’とは人生における‘ambiguity’のこ

とを言っているのか、つまり、さまざまな力を束ねたもの、それらが単に共存するというだけの理由で束ねたものを指すのか？それとも、それは一種の修辭的技法としての‘ambiguity’（多少とも意識的な形における‘allusion’、‘conceit’、‘pun’の示す‘ambiguity’）を指すのか？もし、前者だとすればエンプソン氏の命題は全面的に間違っている。詩は単に人生の断片ではない、詩は詩人の心によって分離、考察および判断された断片である。一篇の詩というものは現象というよりもむしろ本体である。もし、後者であるならば、エンプソン氏の命題は少なくとも誇張されすぎていると言うことができる。

(Empson xii)

このようにスミスは、エンプソンが用いた‘ambiguity’について、人生における‘ambiguity’と、‘allusion’、‘conceit’、‘pun’の示す‘ambiguity’を一種の修辭的技法としての‘ambiguity’とに区別し、それぞれに持つ‘ambiguity’の意味に対して反論している。これに対して、エンプソンは以下のように再反論した。

スミス氏の批判の最も強い部分は、私が‘ambiguity’を漠然としかとらえていないために偉大な詩のあらゆる部分に‘ambiguity’が存在すると考えたことである。しかし、サッフォー、ダンテ、ワーズワスの〈ルーシー詩篇〉においては明らかに間違いであるというように私は受け取った。ただ、奇妙なことに、同じ頃、他の書評家の一人はダンテの一節を、もう一人はワーズワス〈ルーシー詩篇〉の一節を引用しながら、スミス氏とはかなり異なる意見を述べていた。この二人は、そういう引用によって偉大な詩の持つ真の‘ambiguity’の例を示そうとしたのであり、また、この‘ambiguity’こそ、私が考察した表面的で複雑な‘ambiguity’の例の根底にあり、それらに価値を付与しているものだと言おうとしたのである。私には後者の考えの方がしっくりくるが、おそらく、これら二つの意見は、実際、そ

れほど異なるものではないだろう。ここで、私はひとつの問題に対して答えなければならない。本書で考察している種類の‘ambiguity’を擁護するためにはどのような主張をすればよいか、そして全ての優れた詩には‘ambiguity’があるか？

私は優れた詩には‘ambiguity’が含まれていると考える。しかしながら、その証明として、私の開発した方法はしばしば不適切であると認めないわけではない。私の理解では、偉大な詩には常に明確に提示された特殊な事象から一般論への拡大を感じさせる。それは常に、特定の語で示せないため、一層、厳然と存在する人間的経験の背景に訴える。細い鑿の方が、細い分、一層深く核心に掘り進めるかもしれないということを否定すべき理由はない。私は、読者が一見単純な詩行に深く心を動かされる時、その読者の内面で動いているものは過去の経験であり、また、過去に下したさまざまな判断がつくる構造の跡であると考え。詩に本当の喜びを見出すことがどのような感じのものかを考える時、そのような詩行の批評として最も探求的なものが、それほどにも広範な感動と静けさの原因となるものを、もし詩行の含意の中に何ひとつ見つけられないとしたら、それは驚くべきことであり、およそ不愉快なことであると私は思う。

(xv)

上記のように、エンプソンは優れた詩には全て‘ambiguity’が存在すると言明し、その詩に含まれている意味は特殊な事情から一般論への拡大を明確な語で示すことができないため、より経験という背景が重要になるということを説明している。この考えこそ、エンプソン以前の詩の解釈による意味の不正確さは詩の欠点であるという主張を覆した彼の功績ではないだろうか。また、このような批判を受け容れる態度を、ハイマンは「エンプソンにはソクラテス的目的から彼自身の方法に対してなされ得るあらゆる非難を受け容れさえする。」(岡本 15) と評する。このように、彼の姿勢にはソクラテスの問答法的な思想⁶の影響がみられる。また、再反論にもあるように強く経

験を訴えるところには彼の経験論的な哲学思想が現れていると同時に、これがエンプソンの‘ambiguity’の起源なのかもしれない。

III. Seven Types of ‘Ambiguity’

エンプソンによる‘ambiguity’の分析方法是、岩崎訳『曖昧の七つの型』の初版への序において、「私がここで用いている方法は『モダニストの展望』の中のグレイヴス氏によるシェイクスピアのソネット 129 番 “The expense of spirit in a waste of shame”（恥辱の荒地に生気を浪費すること）の分析から借用したものである」（岩崎⑤ 25）と言明している。また、同時にエンプソンはその著書において I.A. リチャーズの分析方法に異を唱えているところもあるが、かなりの部分に彼の影響を受けている。⁷たとえば、ハイマンによれば、「エンプソンは、詩は全くというわけではないとしても、事実上、伝達される意味の問題であるとし、また、詩の意味は人間経験の他のいかなる様相と同じように分析の余地があるという。この二つを基本的前提としており、これらは I.A. リチャーズから受けたものである」（岡本 9）と同様の見解を示している。また、少し古いが、福原麟太郎は I.A. リチャーズからの影響について述べてはいないものの、「書かれた文章を分析して、その各部分が持っている連想を列挙し、それから、その文章が表現しようとした意味を彷彿せしめるという方法である。」と解釈し、「そのようにすると、文学は曖昧な表現によってある効果を得ているということがわかり、その曖昧は 7 種ある」（福原 12:488）と述べている。

以下は、エンプソンが分類した 7 つの ‘ambiguity’ における定義である。

- (1) First-type ambiguities arise when a detail is effective in several ways at once.
- (2) In second-type ambiguities two or more alternative meanings are fully resolved into one.
- (3) The condition for third-type ambiguity is that two apparently

unconnected meanings are given simultaneously.

- (4) In the fourth type the alternative meanings combine to make clear a complicated state of mind in the author.
- (5) The fifth type is a fortunate confusion, as when the author is discovering his idea in the act of writing (examples from Shelley) or not holding it all in mind at once (examples from Swinburne).
- (6) In the sixth type what is said is contradictory or irrelevant and the reader is forced to invent interpretations.
- (7) The seventh type is that of full contradiction, marking a division in the author's mind.
- (8) General discussion of the conditions under which ambiguity is valuable and the means of apprehending it.

(Empson v-vi)

エンプソンは「7つの型は、単に便利な枠組みというだけではないと言えるならば、それは論理的混乱の度合いの次第に進む各段階を示しているつもりである」と言明している。これについて、ハイマンは「それらの型はその議論のコンテキストを離れると無意味であり、エンプソンはどこでもそれらを正式に箇条書きにしているわけではないが、7つの型の移行の順序をはっきりさせるために、エンプソンの定義を以下のように要約する」(岡本7)と述べている。

- (1) 一つの語、一つの構文、あるいは一つの文法構造が、ただ一つの陳述をしていながら、その効果が同時に何通りにも働く場合
- (2) 二つ以上の意味が全て作者の単一の意味を増幅する場合
- (3) 二つの観念が文脈上どちらも当てはまるというだけの理由で結び付けられ、ひとつの語で同時に表現される場合
- (4) ある陳述の二つ以上の意味が互いに矛盾しあったまま結びつい

- て、作者の内部のより複雑な精神状態を明らかにしている場合
- (5) 作者が創作行為の中で観念を発見しつつあるか、あるいは、まだ直ちにその全体を心に抱いているわけではないかして、たとえば、ある直喩があっても、それは正確には何にも当てはまらず、作者が二つのものの一方から他方へと揺れ動いていて、その直喩が両者の中間に位置している場合
 - (6) ある陳述が同義異語反復によったり、矛盾によったり、あるいは、何か述べたとしても見当はずれの陳述ばかりであったりして、何も言っていないに等しく、その結果、読者は自分独自の陳述を作り出すことを余儀なくされ、しかも、それらの創り出した陳述が相互に矛盾しがちである場合
 - (7) その語の持つ二つの意味、その曖昧の持つ二つの価値が文脈によって二つの相対立する意味であることが明らかにされ、その結果、全体の効果が作者の精神内部の根本的な分裂を示すことになる場合

上記のように、エンプソンは‘ambiguity’を7つに分類しているが、この分類に対する彼らしい面白い記述もある。たとえば、彼は最後の章において「より本格的に分析を試みると、これらの型はおそらく些細で、お互いにほとんど区別ができないと思えるだろう。」(Empson 253-54)と述べている点である。たしかに、エンプソンは‘ambiguity’を7つに分類してはいるものの、「第4の型などは、第3の型の大部分および第5の型以降のほとんど全ての型がこの型に含まれるだろう」(133)と言明している。このように、どの角度から考察するかにもよるのだろうし、詩人ならではの言葉遊び的な側面を強調しているのかもしれないが、同時に7つに区別することで読者に対する分りやすさを強調したのかもしれない。彼は‘ambiguity’の定義を変更する際も「読者の混乱を避けるようにする」(1)と述べており、ここからも、‘ambiguity’を可能な限り一定の分類に分けたとも考えられる。もちろん、そのあたりの真意は定かではないが、その分類はいわば「不連続の連

続」とでもいえるかのような独特な著書であるように思われる。ところで、ハイマンはエンブソンが述べているわけではないとの断りを入れつつも、7つの型の分類について「単純なものから複雑なものへと移行しているばかりでなく、さらに一般的に詩的豊かさの比較的小さなものからより大きなものへと移行している」(岡本 7) と述べている。さらに、ハイマンはこの7つの分類の中で、とりわけ第7の‘ambiguity’は「最も大きな論理的混乱を含む‘ambiguity’」とされており、その例として、エンブソンが特に力を入れて分析しているのが、G.M. ホプキンズ (Gerard Manley Hopkins) のソネット「長元坊」(The Windhover) とジョージ・ハーバート (George Herbert) の「犠牲」(The Sacrifice) であり、これらの詩には作者の中のプロイ的な対立が異なった判断系によって強く欲望され、両方に適合する言葉によって同時に語られている」(13-14) と解説している。また、ジョン・ハッフェンデン (John Haffenden) によれば、「エンブソンは、ホプキンズとハーバートの詩にはキリストの魅力と人知および道徳的に抵抗する魅力の間にある論争の観念を具体化したものである」(Haffenden 284) と解釈した。とりわけ、「エンブソンは、ハーバートが彼の詩で直面したものはキリストである神の要求と人類の生得権との間の基本的な対立を表わしているものである」(284) と主張している点は面白い。したがって、ハッフェンデンによれば、*Seven Types of Ambiguity* を書き上げた時点で、「エンブソンには *Milton's God* にあるようなニュアンスが本書には盛り込まれており、言語分析の新しい分析方法だけにとどまらず、キリスト教の教義および歴史の分析批評でもある」(282) と解釈しているように、この問題はエンブソンが生涯追いつけた問題のひとつである。

IV. The seventh type of ‘Ambiguity’

エンブソンは第7の‘ambiguity’の特徴として「語の二重の意味、‘ambiguity’の二つの価値は、コンテキストにより定義された二つの正反対の意味を含み、その結果、全体的な効果は作者の精神に潜む根本的な分裂を示すことに

なる」(Empson 192) として、ある一語が対立をなす意味を含むことに着目している。さらに対立について「第7の型における定義の決定的な基準は、コンテキストの観点や個々のコンテキストに対する全体的な態度になってくるといって、この型における基準は論理的というよりはむしろ心理的なものであると認められるだろう」(192) と述べているように、夢分析の重要な要素を詩の理解にも有益だとして、フロイトの心理学を用いている。その中でも、上述したように、ホプキンズの「長元坊」やハーバートの「犠牲」に力を入れている。しかし、忘れてならないのはシェイクスピアで、とりわけ、『ソネット集』(*The Sonnets*) や劇作では『マクベス』(*Macbeth*)、『ハムレット』(*Hamlet*)、『オセロー』(*Othello*)、『尺には尺を』(*Measure for Measure*) が非常に多くの箇所でも分析の対象となっていることである。エンプソンがこの著書で取り上げている数を考えれば、シェイクスピアの作品は‘ambiguity’の宝庫といっても過言ではないだろう。なお、エンプソンは「第7の型はその定義が茫漠としており、それゆえに、全くさりげない安堵の表現や、不安の放棄、あるいは何であれ、これらに類似するものは、第7の型とみなす事ができる」(200) と述べ、『マクベス』1幕3場(マクベスがコーダー領主の地位と魔女達の予言に直面した場面)の分析を始める。以下に、その箇所を取り上げてみたい。

Come what come may,
Time, and the Houre, runs through the roughest Day,

(201)

さあ、なんでも来い。
時と時間は荒れ狂った日も走り過ぎていく。

『マクベス』1幕3場 147-87 行

エンプソンはこの二行について、二つの解釈ができるという。ひとつは、「暗殺の機会、あるいは暗殺の成し遂げられる事実、そして、実行あるいは決断の危機は、何が起ころうともやってくるだろう。だから、どんなに想像

の恐怖に圧倒されようとも（その想像がまるで決心させないように思っても）、それを気にかける必要はないのだ。」(Empson 201) という解釈であり、これは、マクベスが何か起こることを期待しているという意味を含むものである。もうひとつは、「この恐怖の状態はほんの数分間のことだったが、その間も時計はずっと時を刻んでいた。私はまだ彼を殺したわけではない。だから、私は何も心配することはないのだ。」(201) という解釈である。これは前者とは反対にマクベスは何か起こることを期待していないという意味を含むものである。さらに、エンプソンは「この対立の関係にある語は、予定説と自由意志をペアにして考えることができる。それは(予定説的に言って)、私が彼を殺すのを宿命づけられているとするならば、私がどんなことをしようとも、その時は来るだろう。したがって、私は平穏にしていなくてもよいのである。そして、まだ私が平穏を保ち、冷静、かつ悟りきった気持ちでいれば、これら全ての恐怖は私を通り過ぎていくだろう。そして、何も起こらなかったことになるはずである」(201) という解釈を導いている。また、自由意志の見地からいえば、「ともかく（「荒れ狂った日」という戦争の暗示を思い起こせば）、何としようとも、たとえ彼を殺しても、感覚的にとらえられる世界は進み続けるだろう。その世界は私が今考えている程に、本当は恐ろしい世界ではないだろうし、暗殺という行為は、ただ戦争で人を殺すのと同じものに過ぎないのだ」(201) という意味になる。続けて、エンプソンは時と時間のさらなる分析を試みるが、このことについて、エンプソン自身「この分析が入念すぎることははっきりと認識している。」(202) という注までつけている。しかしながら、マクベスの2、3行の台詞から予定説⁸および自由意志という究極的な対立まで踏み込む点には、彼自身の内部にキリスト教のおよび反キリスト教的対立があるようにも思える。つまり、シェイクスピアにみるキリスト教的思想と、エンプソン自身が持つ無神論者的思想を含ませているのかもしれない。

上記の分析に代表されるように *Seven Types of Ambiguity* の特長は一行一行の緻密さ、かつ莫大な知識を駆使した詩の読み方の記述にあり、いろいろな含蓄と言葉の解釈の可能性とが驚くべきやり方でほとんど際限なく紡ぎ出さ

れているという点にあると思う。それを象徴する言葉として、彼は以下のように述べている。

意味を発見してしまうと詩を破壊することになりがちである。韻文の意味とはあくまでも無意味でなくてはならない。つまり、我々は感性を用い、できるだけ知性を用いないようにしなければならないというものである。そのような場合も少なくないが、私としては価値判断の一線を引いて、劣悪な詩だけはその通りであると言いたい。分析は情緒の豊かでない者の逃げ場であるといわれるが、実際は、分析の仕方がまずいということである。知性を用いた結果として、もし詩を破壊することが起こるならば、事態は甘んじて受け容れなければならない。しかし、これが詩の鑑賞を学ぶための通常の過程であり、他の詩に興味を持つようになる可能性は大きく、損失は一時的なものに過ぎない。

(Empson 16)

また、エンプソン独特の分析はあまりにも深読みをしているという非難もしばしば受けているが、エンプソンはなぜ一行一行綿密な分析をしているのか、その真の目的は以下の記述から感じられる。

私が考慮する引用例は、読者が既に理解し、楽しむものであると思っている。したがって、私はその楽しみをより理解できるように十分な分析を試みるに過ぎない。

(6)

このような上記の引用から、エンプソンの分析批評は非常に難解であるといわれているが、引用した文章の中で、エンプソンは丁寧、かつ詳細に詩とはどのようなものかを伝えようとしているように思えてならない。そして、どの理由がはっきり述べられているか分からない点に‘ambiguity’が存在す

るというように、すばらしい詩には常に‘ambiguity’が存在することを証明している。ここに、エンプソンの分析哲学的思想が見出せるのである。なぜなら、G.E. ムーア（George Edward Moore）の分析哲学とは日常の言語を分析したものであり、かつ緻密に分析をおこなうものであるとしているが、同様に、エンプソンは詩を我々の通常の会話と行動に関連する語の型として扱うべきことを公然と主張したからである。この点から、G.E. ムーアは分析哲学を用いて倫理学を展開したが、エンプソン（および I.A. リチャーズ）はそれを文学に用いたといえるのではないだろうか。

V. Conclusion

エンプソンの *Seven Types of Ambiguity* は言語的分析批評として詩における‘ambiguity’を明らかにした著書である。本論文では‘ambiguity’の定義として、*OED* および *Webster* (3rd ed.) に掲載されている‘ambiguity’と、エンプソンによる詩に含まれる‘ambiguity’の意味内容を取り上げた。もちろん彼は‘ambiguity’の中には良いものと悪いものどちらも含まれるということを認識しており、それをはっきりと区別している。実際、エンプソンは「私がこの著書で考察した‘ambiguity’のほとんどは、私には美しいものだと思う（235）」と述べており、彼自身が厳選した美しいと感じる詩を著書に取り上げている。さらに、彼は「‘ambiguity’の本質を示す際に、それをまとめるのに適切な意味の本質を例によって示せたと思う」（235）と述べているように、ひとつひとつ徹底した分析をおこなっていく。その数が、彼が言うように、途轍もない数となって我々の前に現れるが、その莫大な数こそ‘ambiguity’を成立させるのに十分な実態の証明を心がけている証といえる。このようなエンプソンの分析方法は、一言でいえば、「説明されない美は私に苛立たしい思いを引き起す」（9）という語に集約できそうな気がする。

エンプソンは、*Seven Types of Ambiguity* の冒頭で‘ambiguity’の定義を述べているが、‘ambiguity’が7つに分類されることはそのタイトルから推量できる。この分類は単純なものから複雑なものへと移行しているばかりでなく、

さらに一般的に詩的豊かさの発展の度合いによるものとして取り上げているので、自ずと第7の型が最も複雑で詩的豊かさを含んでいると考えられる。この著書で扱われている膨大な詩人達や彼らの著書の引用だけでなく、その分析方法とともに用いられる哲学、歴史学などの援用には驚かされるが、第7の型では、その分析の中心にフロイト心理学を用いている。もちろん、フロイト心理学に頼りきってしまえば文学というより心理学となってしまうが、そのあたりの彼の識別も鋭く、「事実と判断（思想と感情）を、異なる関連のある問題として別々に述べることは、それらがどのような意味で結びつけられているのかを示すものとして不十分な方法である。」(238) と述べ、師である I.A. リチャーズの理論を批判することになるが、彼自身の文学批評のありかたを明確に主張している点は見逃してはなるまい。

エンプソンはこの著書における第7の型⁹として、ある一語に含蓄されている対立と否定に着目し、彼自身の主張のツールにフロイト心理学を用いて分析している。あるひとつの語に対立的な意味が含蓄されているという主張については『マクベス』の台詞を取り上げているが、私が第7の型に興味を持つのは、実際に、原因と目的という意味を内包する反意語である語 (cause) に直面したからである。しかしながら、エンプソンの分析は、さらにその先の心理にまで到達し、『マクベス』の台詞の一部から宗教的な意味をも含蓄していると分析する。この分析方法から文学や心理学はひとつの表現ツールであり、本質的にはこれら学問が密接に関連していることを言及しているのではないだろうか。

註

- 1 スタンレー・ハイマン 著の *The Armed Vision: A Study in the Methods of Modern Literary Criticism* が入手できなかったため、ハイマンの見解は岡本靖正訳 *William Empson and Categorical Criticism* 『批評の方法〈10〉エンプソンの方法』を全て引用した。
- 2 OED では本文に掲載した定義以外に2つの定義が掲載されているが、何

れも *Obs.* となっているため本文から割愛した。(以下に割愛分を記す。)

1, Subjectively: Wavering of opinion; hesitation, doubt, uncertainly, as to one's course. *Obs.*

2, *concr.* An uncertainty, a dubiety. *Obs.*

- 3 *Webster* でも *OED* と同様に本文に掲載した定義以外に 1 つの定義が掲載されているが、こちらも *Obs.* となっているため本文から割愛した。(以下に割愛分を記す。)

1, *Obs.* : intellectual uncertainty : DOUBT

- 4 *Seven Types of Ambiguity* の日本語訳については原本を基に独自でおこなったが、ひとつの語に多くの意味がある等の場合は意味の選択の指標として『曖昧の七つの型』(岩崎宗治訳)を参考にした。
- 5 ウィリアム・エンブソン著の *Seven Types of Ambiguity*. (1930) の初版が入手できなかったため、初版の定義の日本語訳は小川和夫著『ニュー・クリティシズム—その歴史と本質』から引用した。
- 6 問答法とは、「結論が正しければその仮説は正しく、結論が正しくなければその仮説も間違いとするもので、ソクラテスは哲学の研究にあたり、こういうやり方で他人とも問答して正しい答えに近づこうとしたのである」(哲学・論理用語辞典 259) とあるように、エンブソンがスミスの反論を代表的として取り上げている一方でスミスの犯した間違いを取り上げ、再反論するところは本質的に問答法を援用しているのではないだろうか。
- 7 I.A. リチャーズの嫌った精神分析法をも学んで文学の価値、それは精神の独立という修練に助けとなるものという考えであったと指摘している。(福原 10:407)
- また、フロイディズムのほかに、もうひとつ、I.A. リチャーズと意見が異なる問題が、‘ambiguity’には含まれるとし、それは I.A. リチャーズの言う「指示言語」と「喚情言語」の問題にあると指摘している。(岩崎⑭ 14)
- 8 人生の出来事的一切全て前もって神によって定められているという考え。

一切は神の意思にもとづくものだから、人間の自由意志は全くなく、ただ全能の神に対する完全な帰依を徹底した謙虚な態度をとらねばならぬとする。キリスト教においてはキリスト自身の言葉にはこの考え方をはっきりと示すものはない。しかし、「人間は罪に陥るようつくられたものだ」(墮罪)「これを救うのは神のみ」(救い)というキリスト教神学の考えをめぐって、パウロ、アウグスティヌス、ルター、カルヴァンにより予定説は発展させられた。予定説は今でもプロテスタント、ことにカルヴィニズムの信仰では根強く生き残っている。(哲学・論理用語辞典 385-86)

- 9 エンプソンにおけるフロイディズムは、後に『牧歌の諸変奏』(*Some Versions of Pastoral*)における「不思議な国のアリス—牧童としての子供—」の有名な分析としてさらにはっきりと現れることになる。(岩崎① 14) さらに、ハイマンは「不思議な国のアリス」は文学を簡潔にフロイト的に分析したもので、これまでに最も完全な成功を収めた論文であろうと述べている。(岡本 25)

Works Cited

Empson, William. *Seven Types of Ambiguity*. (1930) ;New Directions, 1966

Haffenden, John. *William Empson: Among the Mandarins*. (Vol.1) Oxford University Press, 2005.

---. *William Empson: Against the Christians*. (Vol.2) Oxford University Press, 2006.

Oxford English Dictionary. Oxford University Press.

Ricks, Christopher. "William Empson." *The Proceeding of the British Academy*, Vol.71 (Oxford University press, 1985)

The American Heritage dictionary of The English Language. Houghton Mifflin Company. Forth edition

Webster's Third New International Dictionary. Merriam-Webster Philip Babcock Gove.

- アート・バーマン、立崎秀和訳『ニュー・クリティシズムから脱構築へーアメリカにおける構造主義とポスト構造主義の受容』未来社、1993。
- ウィリアム・エンプソン、岩崎宗治訳『曖昧の七つの型⑤⑥』岩波文庫、2006。
- 小川和夫『ニュー・クリティシズムーその歴史と本質』弘文堂、1959。
- スタンレー・ハイマン、岡本靖正訳 *William Empson and Categorical Criticism*『批評の方法〈10〉エンプソンの方法』大修館、1974。
- 瀬谷廣一『語根中心英単語辞典』大修館、2001。
- 寺澤芳雄編『英語語源辞典』研究社、1997。
- テリー・イーグルトン、大橋洋一訳 *Literary Theory*『文学とは何か』岩波書店、2007。
- 福原麟太郎『福原麟太郎著作集（10）英文学評論』研究社、1969。
- 『福原麟太郎著作集（12）英文学の歴史』研究社、1969。
- 矢本定幹『イギリス文学思想史』研究社、1972。
- 思想の科学研究会編『新版 哲学・論理用語辞典』三一書房、2007。